

尚中の私生活

大滝紀雄

一 晩年の尚中

本日は尚中の日常生活の一側面というか、余り人に知られていない、軽妙洒脱な風流人としての人柄に触れてみたいと思う。尚中が医学、医術、翻訳、教育の面で優れた人物であったことは、私が今更いうまでもない。しかし、その反面ウィットに富み、しゃれ気があり、遊芸を好み、趣味人として芸術的な側面のあったことは案外知られていない。

こうした性格は生れながらにしてあったと思われるが、多忙で努力家の尚中が、風流な生活を楽しむことが出来たのは、その晩年に限られた。明治八年（四十九歳）以後死に至る明治十五年（五十六歳）まで続いたと思われる。もっとも明治十年には西南戦争があり、進が陸軍軍医総監として大阪へ出張、尚中は留守を預り順天堂に止まった。また、根岸の家の新築が明治九年から十一年まで足かけ三年かかったので、本当の晩年は、明治十一年（五十二歳）根岸へ隠退した後であらう。

明治八年四月三日は順天堂にとって忘れられない日である。この日下谷練堀町から、六十余名の入院患者が新築された御茶の水の順天堂に移された。尚中はそれ迄の心労と安堵感のためか、翌四月四日発熱、十日頃から病状悪化、十三日には持病の肺結核による咯血に襲われた。五月末には病状も回復し、六月には約一カ月間伊香保に転地療養に出かけ、七月

には帰京した。七月七日、進は尚中病気の電報に接し六年間のドイツ留学を終えて帰国した。

明治九年一月尚中は熱海へ避寒、その後も時折熱海へ赴いた。その頃の尚中の日常生活の様子は、彼の出した関寛齋宛の二通の手紙（順天堂史上巻刊行後発見）によってほぼ知ることが出来る。

山田楽出京ニ付托寸楮……畢竟宿痼追々身ニ逼リ、且ハよる年ニテ万事に惰ク、殊に当年ハ向寒ニ至リ一際老衰を覚え、上野山陰の幽居ニ屈伏仕運動ハ勿論外出絶念仕候。只日中ハ背を日ニ晒らし得意の書を読み、倦めハ盆栽ニ灌ぎ、或ハ習字をなして纔ニ日をくらし、夜ハ新聞を見て僅に鬱を遣るのみ。われながらふがいなき身と長歎するのみ……。

（明治八年）十二月五日夜

笠鷲拝

関盟契 侍史

是よりは意外の御無沙汰に打過……昨初冬より根岸別荘に退隠し、万事に関せず司馬公の独示に倣ひ、意進めは机に倚りて書を読み、まま筆を執りて之を草し、志倦（め）ハ出て逍遙し、庭中の草木を陪養し、又鳴禽啼鳥の声に感して往時の非を悟り、開花落葉の変を視てハ事時の運を□る行くに、幸かゝる所なければ縦まに骨董舗を冷脚し、臥するに拘せらるゝ所なければハ八時を過ぎて夜の明るを知らず。こは病を療すとて自ら許るし禁せざるものから、放逸自由の拙に過くるはあるへしやハ。されは征韓非征韓の輿論街に喧しけれども耳に留まらず、勅任奏任身に榮ありて一族耀けとも物のかすとせず。独り五十の嶺を降る際に及びては頑然たる心底に凝結し、石ならされハ転ひへからず、無形なれば手もて掃ふへからず……拙家一同無事、病身ながらも子供の殖候ては当惑、子宝とハ申ものの差当（て）子貧乏是亦遊曆を妨くる一源因ニ御座候……

二月五日認

関賢兄 侍史

笠翁拝呈

右の二通の手紙から察せられる様に、尚中は根岸の別荘に隠退後は、好きな本を読んだり書を書いたり、ニーマイエルの内科書の翻訳をしたり、これを済衆録と名付けて出版に勤んでいた。しかもその合い間には庭木の手入れをしたり、骨董屋を冷やかしたりした。そのほか、おそらく後妻なおに三味線を弾かせ、自ら長唄をうたったり、好物の鰻の蒲焼を食べながら余生を楽しんでいたと考えられる。

政治問題には余り関心を示さず、一身一家の立身出世も問題にできなかった。

根岸の邸宅は佐藤要先生その他二、三人の人の記憶によると、母屋は萱ぶきの田舎屋風の造りで台所は百姓屋のそれに似て、表に建仁寺垣をめぐらし、内垣に植込みがあって表からは覗けないようになっていた。裏手には音無川の流れがあり、谷中の墓地に近く、隠遁生活には誠に恰好な住居であった。

また、手紙の中に子宝、子貧乏の文字がみられるが、尚中先妻さだは肺結核を患い慶応三年三月十二日に死去した。後妻なお（ナホ）とは、さだの服喪期間が過ぎてから再婚した筈である。なおは佐藤籍に入らなかったが、これについて私は順天堂医学二六巻一号に「佐藤尚中夫人」の一文を記しておいた。明治元年から九年に至る間に、尚中、なおの間に楽（佐夫人）、衛（城家を継ぐ）、梅尾（進養女恒久夫人）、幸（進養女今泉嘉一郎夫人）、福待、潤家（大滝家養子）の子宝に恵まれた。従って谷中にある尚中先生頌徳碑に刻まれた川田剛撰文の側室某氏は明らかに誤りである。

一 尚中の号、呼称

尚中は晩年、書や手紙に笠翁、笠鷺真逸などの呼称を好んで用いた。

笠翁 かさのおきな リュウオウと読む。諸橋轍次の大漢和辞典をひいてみると、笠翁は清の李漁の字と記されている。笠翁十種曲などの作品があり、李漁は小説家で作詩をし、箏を楽んだ風流人であったらしい。尚中がこの世の中から隠退し、農夫の様な笠をつけた自分の姿を清の李漁の笠翁になぞらえたのは、ごく自然とも考えられる。

笠鷺 リュウオウと読み発音も笠翁と同じ。根岸の里、すなわち日暮里（ひぐらしのさと）、鷺谷は現在の喧噪の街からは想像も出来ないが、その頃は東京の郊外地で鷺がさえずる人里離れた所であった筈である。後述の「鄙の室」にも庭でホーホケキョーが聞かれると記されている。

かさのや 尚中はまた自らかさのや、笠廻、笠乃家蓑三郎などと称した。いつ頃からこれらの称号を用いたかは不明だが、明治三年尚中四十四歳の時、岡本道庵に宛てた手紙にかさのやと記されている。

真逸 この語は辞書にも見当たらないが、私個人の推量では「まことに逸れる」ということで、完全に世間から没交渉で隠通したいという意味ではなかるうか。

尚中はふつうシヨウチュウと読むが、明治四年東校から南校へ出した文書中に、尚中にタカナカとふり仮名をつけてあるのを小川先生が注目された。

三 順天堂の紋章と色など

佐藤家の紋章すなわち正式な家紋（正紋）は「源字車」である。公式ではないが、軽い気持で使える紋に替紋というのがある。現在でも順天堂のシンボルマークとして用いられている、いわゆる「サの字くずし」の替紋は佐藤の「サ」の字をシンボライズしたものに他ならない。進の院長時代、尚中の即興的なシャレ気から、ある日突然考案されたのがこの紋であることを、その場に同席していた佐藤佐が証言していたというから間違いなかるう。すなわち、片仮名のサの字の横棒を下へ曲げたのを本家（佐藤進家）の紋とし、縦二本棒を左右に曲げたのを分家（佐藤佐家）の紋としようという尚中の提言に基づくものである。このマークは戦前には、順天堂の備品である机、火鉢、鉄びんなどのほか、植木屋や下足番の印伴纏、ふくさ、風呂敷などに用いられた。戦後にも有山記念館の講堂の机を始め、要所要所や、運動選手のトレーニング・ウェアにも使用されているということである。仁をもじった篆書に由来すると説く学者の説もあるが、これは間ちが



本家紋



分家紋

いで、単純な「サの字くずし」に他ならない。

そのほか中央に「サの字くずし」を、その両側に並線を書き上下にひら仮名のさの字を十個ずつあしらい、サトウとしゃれた染め抜き手拭を順天堂職員に配ったともいわれる。これも尚中のウィットに富んだアイディアの実践であろう。

順天堂の色としては紫色が尊重される。これは佐藤のふじをとったもので、ふじ色が正しい。地味ではあるが重厚である。「順天堂だより」の表紙や、「順天堂史上巻」の装訂も同色である。また佐藤家親類の集りを「藤のゆかり」といい、家系図などにもこの語が用いられる。いずれも尚中趣味であろう。

江戸末期には駕籠が用いられた。かごかきには先棒と後棒とがある。尚中は即興的にかごかきの先棒に「佐吉」後棒に「藤吉」という名を与え、佐藤を二人の名に分けた。明治期、進の時代となり、かごは人力車に変わったが、車夫の名前は「佐吉」と「藤吉」が踏襲された。

井上虎三を自分の養子として迎え、佐藤佐と改名させたのも尚中で、義兄の進をよく助けよという意味からであった。

四 趣味人としての尚中

尚中の遊芸の第一に三味線、長唄が挙げられる。ことに晩年には一日もこの趣味が欠かせなかつたらしい。尚中の後妻なおは信州の大名、諏訪家の江戸上屋敷に奥方付腰元として奉公していた。なおは三味線に秀で、長唄と美声を誇っていた。尚中はしばしば諏訪家に往診をしていたが、これが縁でなおが後妻に迎えられたのであろう。

現在「鄙ヒツの室ム」の本文が残っているが、長唄 坂田仙八 三弦 杵屋小三郎 杵屋十造 笠廻那保述 明治十年五月と記されている。節は芳村芳一、曲は杵屋東成となっている。笠廻那保すなわち尚中夫人なおが述べたものを誰かが書き下したもので、原文は尚中の作と思われる。あるいは夫妻の合作であるかも知れない。

「ここは名にあふ吾妻なる忍が岡のかたほとり……主はたれと知らねども、昔の栄花をうち捨て、ひとり書じゃくを友ちどり、はまの真砂のかずかずを、選みてぞあみなせる、筆のいのちも尽くるまで……」

尚中の机に向った勉強すがたがありありと画かれている。中段には庭の樹木の姿、千草にすだく虫の声、鳥の鳴き声等が記されている。後段には娘たちの舞姿が詠まれている。

「あらおもしろや、桜がさして舞振りは、姉（らく、佐藤亭、要、勉の母）も妹（うめを、佐藤清一郎母）もいちやうに、また小桜の菓立せぬ、彼岸桜に程遠き……」

娘たちの舞踊も本格的で、それらの衣裳はつづらに収納され佐藤佐家の土蔵にしまわれていたが、関東大震災で焼失したということである。

この「ひなのむろ」は尚中没後もしばしば演じられ、大正年間にも柳橋の老妓が唄ったといわれる。今、私の手許にある昭和十二年八月の順天堂医事研究会雑誌（五七八号）をみると、その年の祖先祭に長唄があり、その中で「鄙ヒツの室ム」が上演されたと書いてある。ラジオでも何度か放送されたようである。現在楽譜が見当たらないが、曲を御存じの方があれば是非テープに保存しておきたいものである。

また尚中は落語が大へん好きであったといわれる。当時の長唄の第一人者杵屋勘五郎とともに、落語の第一人者三遊亭円朝らの芸人とも親交があったようで、しばしば屋敷内に招いたという。

四月十日佐藤泰然の命日を期して上野精養軒で祖先祭が行われる。これは明治期に始まり、大正、昭和と続いており、戦前は佐藤家を中心に行われていたが、戦後は順天堂大学を中心に行われている。歴代院長を祭る祖先祭が行われる大学

は余り類例をみないが、これが八十年以上も続いているのである。しかも毎年同じ精養軒を宴会場と定め、落語、講談、奇術（マジック）などの出し物も昔と余り変わらず、尚中精神が百年も続いているのは、まさに順天堂でなければ実行できないことである。蛇足ながら、現在谷中の尚中の墓所の隣りに勘五郎の墓が建っている。

五 結 語

尚中は隠退後は完全に世間と没交渉になり、読書、翻訳三昧のほかは専ら自分の趣味を生かして余生を楽しんだが、年の持病には打ち勝てず、五十六歳を一期として死去した。

本文では触れなかったが、尚中は江戸滞在中の天保七年十一歳の時から数年間、儒者兼漢学者の寺門静軒に学んだことがある。静軒は「江戸繁昌記」の著者として有名で、単なる儒者ではなく、幅広い風流人であった。晩年の尚中が軽妙洒脱で、多趣味な気風を円熟させたのは、子供の頃に学んだ静軒の風格が影響したのかも知れない。

最後に本稿に関して種々の資料と御教示を与えて下さった順天堂大学評議員 佐藤要先生に深謝の意を表します。